

# 子どもの笑顔で家庭も明るく 現実社会を意識した支援活動

全寮制 フリースクール セカンドスクール



学校長 こじま 児島 豪 さん(写真右)  
施設長 いはら 伊原 立浩 さん(写真左)

さいたま市桜区で全寮制フリースクールを運営する「セカンドスクール」は、不登校やひきこもりなどの若者が集団生活を通して自立（自律）を目指す。様々な課題を抱え入寮してくる子どもたちだが、ほとんどの子どもが1か月程度で元気を取り戻すという。しかし、最終的に戻る先はそれぞれの家庭だ。子どもが元気になって、周囲の環境が変わらなければ同じ問題が繰り返される。子どもの支援そのものよりも家庭へのアプローチや保護者との協力も大きな鍵となる。

無責任な言葉にあふれた世界  
寄り添ってもらえず  
苦しんでいた子どもたち

**児島** 私たちの活動は知人が運営しているフリースクールから是非講演に来て欲しいと言う一言から始まりました。

そこで出逢った数多くの、素直で将来に無限の可能性を秘めているが苦しんでいる子どもたちの存在を知り、自分にも何か出来ることはないかと、ボランティアで講演・炊出し・就労支援を行うことから始まりました。

実はボランティアで行っていたフリースクールとの意見の不一致から一時活動を辞めていたこともあったのですが、就労支援して社会に送り出した生徒の結婚式に招待してもらった時に、「児島さんに出逢ってなければ今もまだ部屋の中にいたと思う。今の仕事は辞められないけど、休みの日なら全部手伝いに行くから児島さんの正しいと思う形で学校を立ち上げて欲しい！」と言われ、悩みに悩み、背中を押され、ボランティア時代から仕事の休みに共に活動していた伊原（施設長）とセカンドスクールを立ち上げました。ですからこの活動自体も今まで出逢った人たちのお陰で立ち上がったのです。

**伊原** 当初関わっていたのは高校中退層や18歳以降の若者で、その6、7割が非行タイプの子供たちでした。しかし、それが5年ほど前から激減し、昔コンビニでたむろしていたような子たちは、今、家から出ずにオンラインゲームをしています。

問題だと思うのは、オンライン上で出会う大人たちの、

表面上だけの都合のいい言葉。そこでは「学校なんて行く必要ねえよ」などと無責任な言葉が飛び交う。私だって会社に行かなくていいのなら休んでしましますが、私には経営者として、スタッフや家族の存在があります。社会に出ればそうした守るべきものを抱えて生きていかなければならず、無責任で上辺だけの言葉は通用しなくなります。

私は現代版の非行がひきこもりだと捉えていて、根底にある「寂しい」という感情は共通していると思います。ところが、昔の「外へ出る非行」は、リスクはありながらも大切なことを伝えてくれる大人との出会いがありました。例えば「高校辞めたんだったら仕事しなきゃ駄目だぞ」などと言ってくれる先輩がいたり、そこには小さいながらも社会があったんです。でも、今は相手が見えない世界で、そうした縮図が崩れています。

こうした世界にいる子どもたちとどう接したらいいか。私も人生で一番本を読み勉強しました。私自身は野球部出身で、いつまでも練習に付き合ってくれるような先輩の存在を社会の中にイメージしていました。しかし、そうした価値観は今の子には合いません。就労支援で本人の意向に合った仕事を就けてあげても、結局2、3日で辞めてしまうこともある。そこで義理や道理を説いても通用しません。ところが「いいんだよ、俺のことなんて。お前が幸せになれば」「俺行くよ」となります。結局、今の子どもたちは、本気で寄り添ってもらった経験がなく苦しんでいるだけだと知りました。

**児島** 様々な場面で子どもたちも成長していくのですが、特に体験プログラムなどで子どもたちの心は動きやすいです。最近で一番大きかったのは、昨年の西日本豪雨による



集団生活を通じて生活習慣や社会性の獲得を目指す。学習時間もプログラムに組み込まれている

